

# 令和の初春 梅花の宴

大化以降248番目の元号として2019年5月1日から施行された新元号「令和」。これまで漢籍を典拠としてきた元号の歴史の中で確認できる中で初めて、日本の古典から選定された元号です。典拠となったのは、奈良時代末期に成立した我が国最古の和歌集『万葉集』。そこで新元号「令和」の初春を寿ぎ、典拠となった『万葉集』巻五「梅花調州二首并序」(梅花の歌三十二首あわせて序)に記された梅花の宴の様子をお楽しみいただきます。

## 梅花の宴 1/4スケール再現

新元号「令和」の典拠となったのは、『万葉集』巻五に編集された「梅花の歌32首の序文」で、天平2年1月13日、大宰帥(大宰府の長官)・大伴旅人の邸宅で催された宴において、梅花を題材に詠まれた32首の和歌の序文として書かれたものとされています。ここではその梅花の宴を1/4スケールのジオラマで再現し、併せて32首の和歌の解説を行います。

## 梅花の宴の文人たち

梅花の宴に招かれた文人たちの様子を、文人たちが題材とした梅の木のもとで、奈良時代の衣裳とともに原寸大で再現しました。新元号「令和」を寿ぐフォトジェニックなコーナーとしてご利用いただけます。

**令和の典拠となった『万葉集』巻五「梅花の歌三十二首并せて序」冒頭部分**

天平二年正月十三日に、師の老の宅に萃まりて、宴会を申く。時に、初春の令月にして、気淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す。

■現代語訳

天平二年正月十三日に、大宰府長官である大伴旅人の邸宅に集まって、宴会を開く。時に、初春の好(令)き月にして、空気はよく風は爽やかに(和らぎ)、梅は鏡の前の美女が装う白粉のように開き、蘭は身を飾った香のように薫っている。

# 御大礼の儀式と装束

令和元年(2019)10月22日、今上天皇陛下の即位の礼における中心儀式「即位礼正殿の儀」が行われました。我が国は、明治天皇が東京へ移られて以降、約150年の歳月のなかで、明治、大正、昭和、平成の四代の天皇陛下によって近代史が紡がれ、今、令和という新たな時代を、今上天皇陛下の即位によって迎えます。天皇の代が変わることで時代の節目としてきた我が国では、「即位礼」と「大嘗祭」は最重要行事と位置付けられ、この二つの儀式を合わせて「御大礼」と称されます。ここでは、御大礼で用いられる高御座と幢、旗の模型や、御大礼で天皇陛下、皇后陛下がご着用になられる装束をご紹介します。

## 天皇の礼服・袞冕十二章

袞冕十二章とは平安時代から江戸時代まで用いられた天皇の礼服です。平安時代、嵯峨天皇の時代の弘仁11年(820)に初めて、天皇の即位と朝賀には袞冕十二章を着用するように定められます。袞冕十二章は大陸から輸入された服制であるため、明治時代に入ると日本風に改められ、以来天皇は即位式に黄櫨染の御袍を着用するようになりました。



## 天皇の装束・黄櫨染の御袍

明治天皇の即位に際し、それまでの袞冕十二章が中国風であるため、これを日本風に改め、黄櫨染の御袍が即位時の装束となりました。明治時代以降は、「即位礼正殿の儀」や立太子礼、毎年元日の四方拝、その他恒例の宮中祭祀のほとんどにおいて黄櫨染の御袍が着用されるようになりました。

## 皇后の装束・十二単

即位礼の時、皇后陛下が御帳台に昇られる時の形式の御盛装です。白小袖に長袴をつけ、その上に単、五衣、打衣、表着を重ね、唐衣と裳をつける仕様は平安時代に近い形式です。

## 江戸時代前期 第113代東山天皇御即位式に見る儀式の進行

東山天皇は、霊元天皇の第四皇子としてお生まれになり、13歳で父の跡を継ぎ、第113代天皇となりました。ここでは「東山天皇御即位式・霊元上皇御譲位行列図屏風」をもとに、1/4スケールで再現した高御座や幢、旗の展示とともに、即位式の儀式の進行を紹介します。



# 令和の初春 梅花の宴

# 御大礼の儀式と装束

J-CULTURE FEST  
ロビーギャラリー特別展示  
2020年1月2日(木)~1月15日(水)  
10:00~20:00(最終日は17:00まで)

# 平安宮廷スポーツスタジアム



**ロビーギャラリー解説ツアー(1月2日・3日のみ)** 各回30分程度

ロビーギャラリーでは、専門家による詳しい解説を聞きながら展示エリアをめぐる解説ツアーを予定しています。ぜひご参加ください。

◇御大礼の儀式と装束	●2日・3日▶①11:30~/②13:30~/③15:30~	■講師 元宮内庁主席主殿長 京都宮廷文化研究所理事 岡本 和彦氏 吉野 健一氏
◇令和の初春 梅花の宴	●2日・3日▶12:30~	
◇相撲節会	●2日・3日▶14:30~	
◇蹴鞠・騎射・打毬	●2日・3日▶16:30~	



# 平安宮廷スポーツスタジアム

TOKYO2020の開催年となる2020年の新春を、平安時代の貴族がたしなできた日本古来の「スポーツ」で彩ります。古くから平安貴族の間で楽しまれた「蹴鞠(けまり)」、馬に乗りながら弓で的を射る「騎射(うまゆみ)」、現代のポロに通じる「打毬(だきゅう)」、そして現代の相撲のルーツである宮廷行事「相撲節会(すまいのせちえ)」を、それぞれの情景を忠実に再現した1/4スケールのジオラマや等身大の衣裳、競技用の道具などの展示を通じて紹介します。

## 蹴鞠 KEMARI

蹴鞠装束・江戸時代の蹴鞠と鞠沓展示

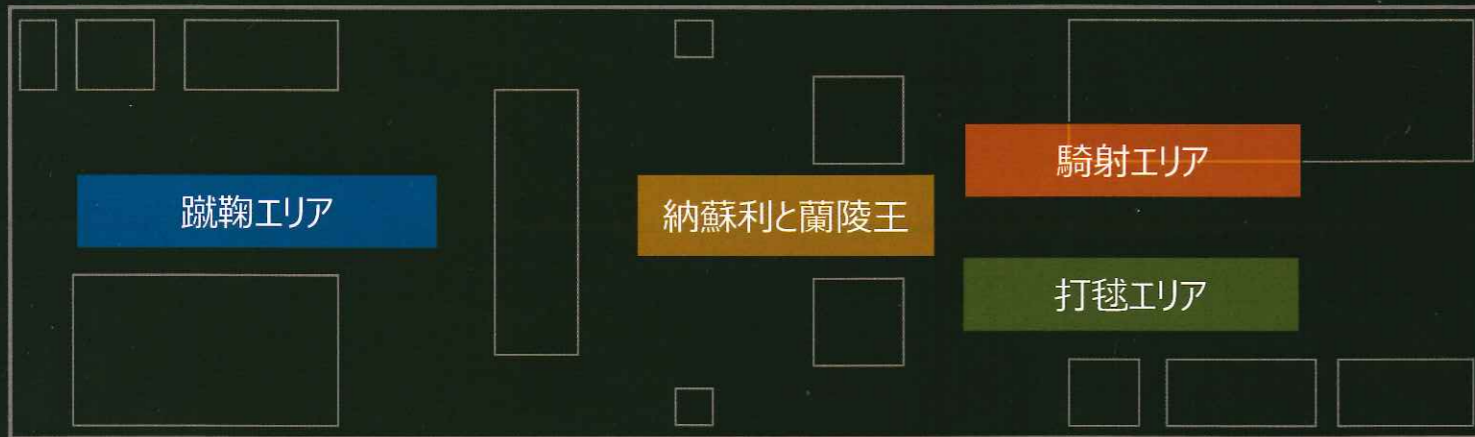
蹴鞠とは、古くから貴族の間で楽しまれた遊びで、数人で輪をつくり鹿革の鞠を足の甲で蹴り上げて長く続ける、中国伝来の遊戯です。ここでは江戸時代の蹴鞠装束や鹿革で作られた鞠、蹴鞠専用の鞠沓を展示します。

平安時代のサッカー ～『源氏物語』「若菜上」より～

『源氏物語』「若菜上」に描かれた蹴鞠シーンを再現。准太上天皇となった41歳の3月の末(旧暦)、源氏は六條院の春の御殿で蹴鞠を行います。蹴鞠に参上した若い公達の中には、柏木の弟たちである、頭の弁、兵衛佐、大夫の君など蹴鞠の技が優れた人々がいました。展示では、平安時代の遊戯であり、スポーツの一つである蹴鞠に興じる若い公達の姿と、源氏の因果応報ともいえる事件のきっかけとなった柏木と女三宮の出会いの場面を具現化します。



有楽町駅側



『年中行事絵巻』巻三 蹴鞠に興ずる公卿たち

『年中行事絵巻』は、平安時代末期の宮廷、公家における年間の儀式、祭事、法会、遊戯などを中心に、民間の風俗を描いた絵巻物で、御白河法皇の下命により描かれたとされています。『年中行事絵巻』巻三には、のどかな春の風景の中、蹴鞠に興じる公卿たちの姿が生き生きと描かれています。冠直衣あり狩衣姿あり、中には僧綱襟の衣の若い僧の姿も見え、桜の木の下では、従者の童が沓の草紐を結び直しています。ここでは『年中行事絵巻』に描かれた蹴鞠に興じる公卿たちの衣裳展示を行います。



『年中行事絵巻』巻三 鬮鶏、蹴鞠(田中家所蔵)

## 納蘇利と蘭陵王

NASORI / RANRYOUOH

唐楽左方走舞の名作中の名作として知られる舞曲「蘭陵王」。舞は「陵王」、曲は「蘭陵王」と言い、全曲40分に及ぶ大作です。「納蘇利」は、高麗楽右方走舞の代表曲で、「蘭陵王」と番舞となります。「蘭陵王」と「納蘇利」は、騎射や相撲など、左右に分かれて行う競技においては勝負曲として用いられ、左方が勝ったときには「蘭陵王」が、右方が勝った時には「納蘇利」が演奏されました。ここでは「蘭陵王」と「納蘇利」で用いる衣裳や小道具を展示しています。



納蘇利(なそり)

蘭陵王(らんりょうおう)

## 騎射 Umayumi

騎射の装束・武官束帯と馬装具

騎射とは、馬を走らせて、馬上より的を射る競技です。主に5月5日の端午の節会で行われました。平安時代の騎射は現在に残っておらず、武家で行われた流鏝馬にその競技の名残を残しています。ここでは騎射の射手の装束、武官束帯と馬装具を展示しています。

平安時代の和製アーチェリーと馬術  
～『源氏物語』「蛩」より～

源氏36歳の夏、旧暦5月5日に六條院夏の御殿にある馬場殿で、端午の節句に行われる騎射が催されました。5月5日は源氏の息子・夕霧が所属する左近衛府の真手結(騎射の本番の意)の日で、夕霧が左近衛府の官人たちを連れて馬場殿にやってきます。ここでは『源氏物語』「蛩」の巻に描かれた騎射の様子を1/4スケールで再現しています。



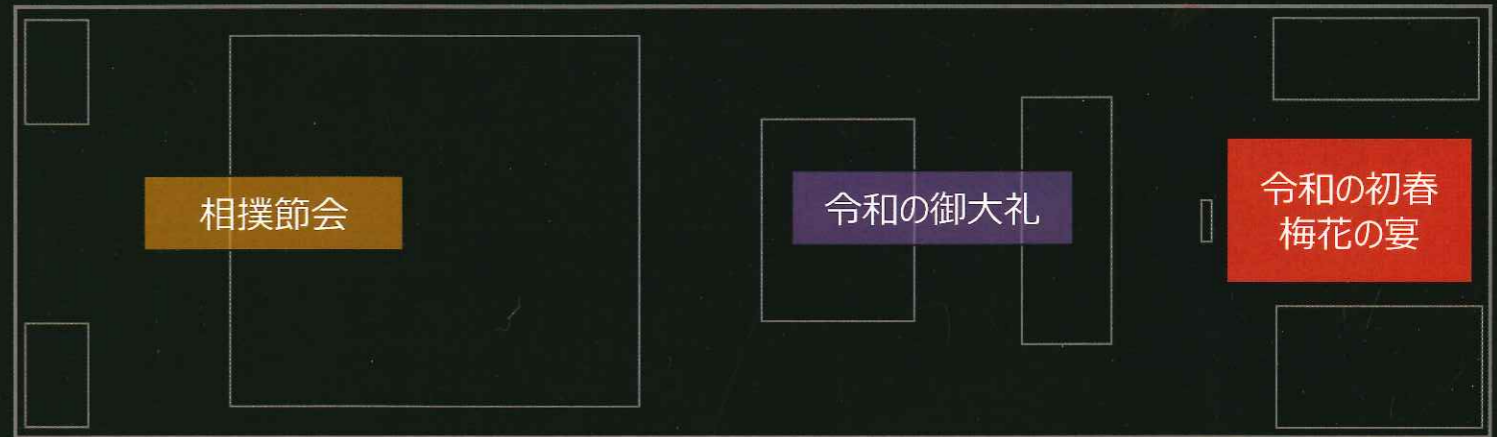
## 打毬 DAKYU

平安時代の和製ポロ・ホッケー

打毬とは、その名の通り毬を打つ平安時代のスポーツで、騎馬で行うものと徒歩で行うものがありました。打毬は宮廷行事として端午の節会の際に、競馬や騎射の後に行われました。打毬の競技を行っている時には、打毬楽という伴奏曲が演奏されました。また、打毬の様子を舞にした舞楽としての打毬楽が生まれ、競馬や相撲など、勝負の折によく演奏される勝負曲へと変遷していきました。ここでは打毬に興じる公達の様子を1/4のジオラマで再現し、打毬楽の衣裳を展示します。



東京駅側



## 相撲節会 SUMAI NO SECHIE

安本亀八作「相撲生人形」バナー展示

宮中で相撲が行われた最古の記録とされている、垂仁天皇7年(紀元前23年)7月、怪力との誉れ高い野見宿禰と当麻蹶速が宮中に召されて相撲を取り、野見が当麻に勝利したという『日本書紀』の記述を題材にした明治時代の人形師・安本亀八の代表作「相撲生人形」の画像を大型バナーで展示します。

安本亀八作「相撲生人形」  
熊本市現代美術館所蔵



最大スペースを使った  
相撲節会図1/4ジオラマ再現展示

奈良時代には、宮中でも相撲が行われるようになったと考えられ、聖武天皇の神亀5年(728)には、天皇が諸国に相撲人を推挙させて、対抗相撲を行っています。天平6年(734)7月7日には、聖武天皇天覧の相撲が行われ、これをきっかけに平安時代初期の弘仁年間(810~824)には相撲節会として恒例化しました。しかし平安時代末期には、御所の度重なる焼失や戦乱の多発などにより中絶し、その後一時的に再開されたものの、高倉天皇の承安4年(1174)を最後に行われなくなりました。相撲はその後、各地の神社における神事相撲、武士の鍛錬としての武家相撲、さらに今日に続く民間の勤進相撲として受け継がれてゆき、現在の大相撲の源流となりました。ここでは宮内庁書陵部が所蔵する『相撲節会図』に描かれた、大相撲の原点となる相撲節会の様子、ロビーギャラリー展示における最大のスペースを使った1/4スケールのジオラマで再現しました。

